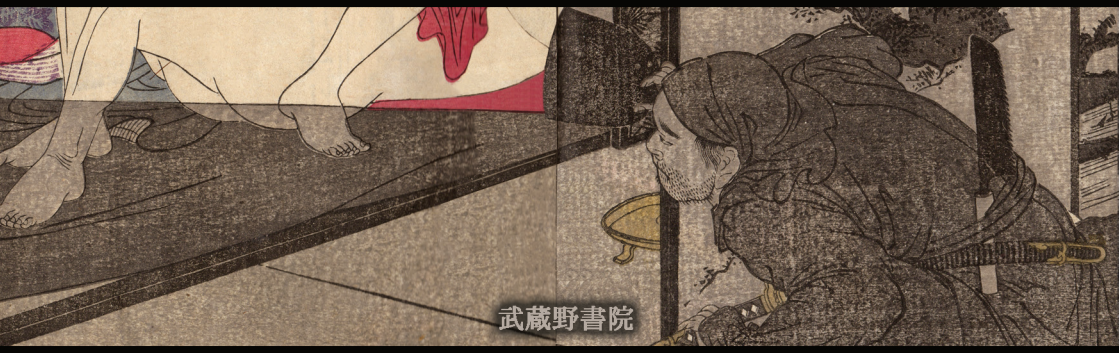
戯作と艶本

馬琴から英泉へ、艶本化の水流

Gesaku (Popular fiction) and Ehon(Erotic books): from Bakin to Eisen, the eroticization of fiction

板坂則子
Noriko ITASAKA

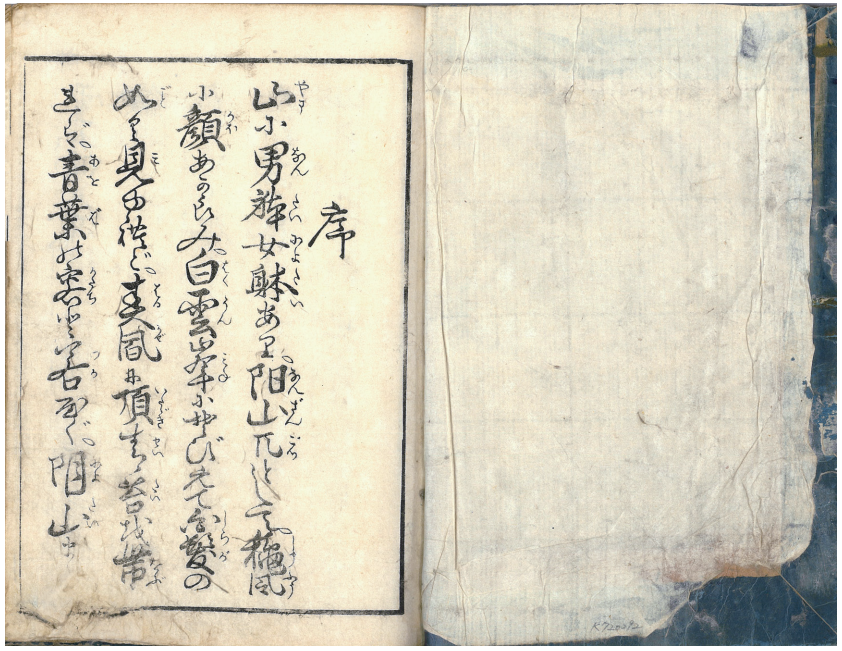


武蔵野書院

『艶本多歌羅久良』

上冊　板坂A本
中冊　浦上満氏本
下冊　板坂B本

01『艶本多歌羅久良』上冊表紙

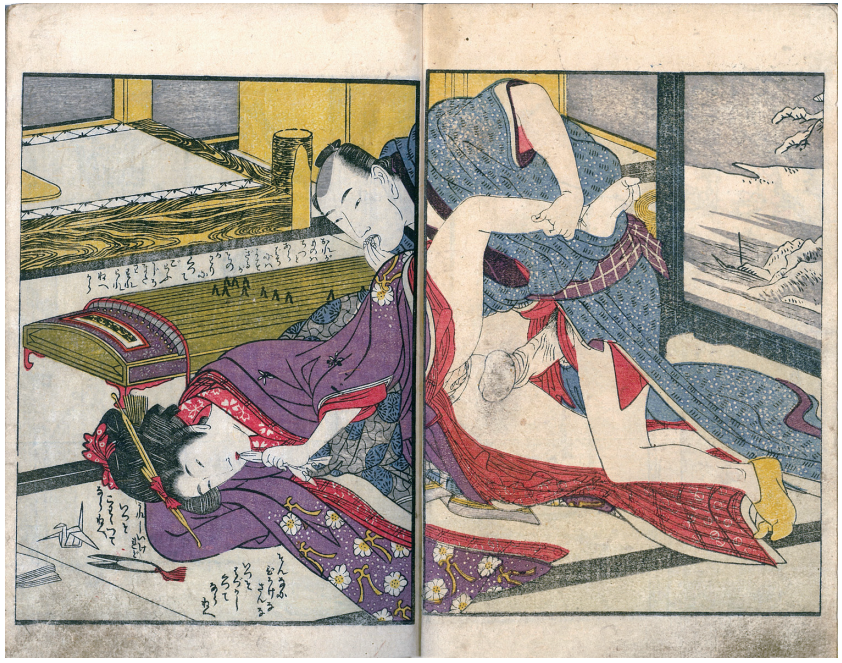


序

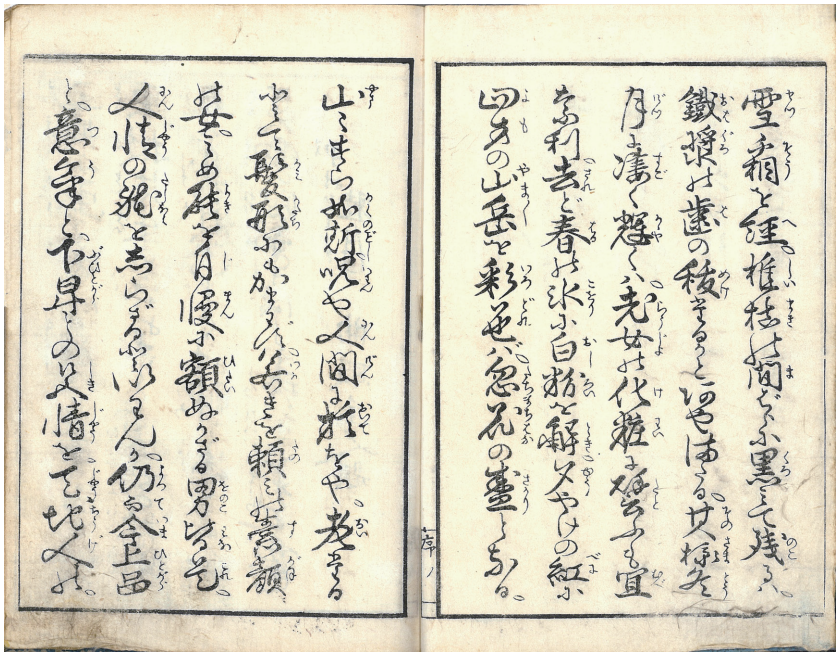
山小男鹿女躰あ王阿山ヒ〻て稲風
小顔あの氏み白雲年ふ世び天て今髪の
めを臭ロ佐ど支風ハ頃ち答ち帯
ま〻ど青葉ハ空ゆ〻ち古ま〻阿山

02『艶本多歌羅久良』上冊　序文

05『艶本多歌羅久良』上冊　口絵



06『艶本多歌羅久良』上冊　口絵



03『艶本多歌羅久良』上冊　序文

04『艶本多歌羅久良』上冊　序文・扉絵

はじめに

曲亭馬琴の読本を研究対象に決めて、まず口絵や挿絵、文字の欠けや掠れなど書誌研究の方法を学んだ。『南総里見八犬伝』初版書誌を纏めたくて、日夜側に置いていたのは林美一氏『秘板八犬伝』（緑園書房、一九六五年）で、掉尾に載る「附編・八犬伝の初版本」は綴じ糸が切れるほどに使い込んでいたのに、この書が艶本『恋のやつふぢ』紹介を中軸に据えていることに気付かなかった。性的な画像が規制されていた時代の書物ではあるが、無知とは愚かしいものである。

架蔵した最初の春画は絵巻『小柴垣草紙』と歌麿『絵本笑上戸』中の数葉で、共に夫の古筆蒐集に紛れ込んでいた。しばらくして二十一世紀になって国芳『当盛水滸伝』や国貞『恋のやつふぢ』、英泉『艶説筑紫琴』などが少しずつ入ってきた。それらを開き、その描線の美しさ、彫りと摺りに施された技巧の巧妙さに喫驚した。通常の戯作の墨摺の美にもほれぼれとするが、艶本の豪奢な鮮やかさに目を奪われた。艶本は私のコレクション対象となった。さいわい、二〇一三年に開催された大英博物館での春画展以降、これまでは秘匿されてきた艶本類が古書店やオークションに出まわるようになり、二十余年を掛けてかなりの書が集まった。収納箱の数が増えていくと、そこから見える世界も拡がり、点在する知見を結びつけてより大きな世界への道を探りたくなる。艶本には、職人としての浮世絵師と彫師、摺師のプライドが惜しげもなく示されている。多くは戯作者が担当する附文では、性が笑いと結びついて奇想天外の展開が描かれている。ひたすら驚きの世界であった。

まずは世の中に一番多く出回ったのはどのような艶本か、という素朴な問いから、艶書往来を書誌と内容の歴史的変遷から見ていった。次いで馬琴に関わる艶本を丁寧に読み解くことを目指した。馬琴は非合法の出版物との関わり

を峻拒した稀有の戯作者であるが、それでもまったくの別世界にいたわけではない。馬琴を通して、私の艶本世界の探訪をこころざした。したがって取り上げた作品数は多くはない。艶本を楽しみ、それを通しての人流を読み解くことを目指したもので、研究書としては趣味性の強いものである。艶本は世に普及しているとは言いがたいことから、その紹介を兼ねて、説明を入れている。江戸の文化を裏側から支えた豊饒な美を、少しでも伝えることができれば幸甚である。

目　次

巻頭カラー図版
『艶本多歌羅久良』
『春窓秘辞』

はじめに……i
凡例……x

第一章　馬琴と艶本……1
第一節　『艶本多歌羅久良』――曲取主人の艶本附文……3
一　歌麿『艶本多歌羅久良』について……5
二　序文と上冊附文……10
三　中冊・下冊の附文……20
四　馬琴と『艶本多歌羅久良』……36

第二節　『代夜待白女辻占』――馬琴と『耳食録』……41
一　『代夜待白女辻占』について……41
二　『代夜待白女辻占』と『耳食録』……45
三　『代夜待白女辻占』の成立……62
四　『比翌紋目黒色揚』と男女同体（アンドロギュノス）の妖魔……67
第三節　『画図玉装譚』――英泉と馬琴……75
一　『絵本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』……75
二　『絵本玉藻譚』と『画図玉装譚』……77
三　『画図玉装譚』について……81
四　『画図玉装譚』梗概……93
五　『画図玉装譚』と『代夜待白女辻占』……100
六　溪斎英泉と曲亭馬琴……109
七　『画図玉装譚』の制作、その後……114
第四節　『恋のやつふぢ』――国貞と英泉……123
一　『恋のやつふぢ』……123

二　初版本と後摺本……132
三　巻之一　序文と本文……140
四　巻之二、巻之三　物語展開……147
五　『恋のやつふぢ』の作者……155
六　『恋のやつふぢ』の特徴……160
第五節　『春窓秘辞』――戯作者と艶本……167
一　蜀山人編『春窓秘辞』……167
二　十二ヶ月の戯文……170
三　『興佳帖』と『菊乃栞』……186
四　『春窓秘辞』から『恥奇漫録』へ……191
第二章　艶本化された馬琴戯作……201
第一節　『春のにしき』――初期読和本の異色作……203
一　『春のにしき』について……203

二　上巻……207
三　中巻、下巻……216
四　『春のにしき』はどのように作られたか……221
第二節　『枕辺深閨梅』――国芳と文京……227
一　歌川国芳と艶本……227
二　『新編金瓶梅』と『枕辺深閨梅』……229
三　『枕辺深閨梅』書誌……231
四　国芳の口絵……235
五　文京（好色外史）の附文……242
六　口絵と附文から見る『枕辺深閨梅』の作られ方……248
第三節　『淫篇深閨梅』と『佐世身八開伝』――魯文の読和本……253
一　仮名垣魯文と艶本……253
二　『淫篇深閨梅』……255
三　『佐世身八開伝』……263

四　『淫篇深閨梅』と『佐世身八開伝』……273
第四節　馬琴著作と艶本……277
一　『金瓶梅』その他の未見資料……277
二　『艶勢喜雑志』の概要……279
三　「真袖の枝折」から『艶勢喜雑志』へ……284
四　艶本におけるテキストと画像……289
五　春水・桃華園・文京・魯文・英泉……291
六　馬琴著作から艶本へ……300
第三章　艶書往来「文のはやし」考……307
第一節　『文しなん』と『文のはやし』……309
一　身近な艶本とは……309
二　十返舎一九『文しなん』……311
三　陽起山人『文のはやし』……322
四　『文しなん』と『文のはやし』……331

第二節　艶書往来「文のはやし」の系譜……333
一　第一類『文しなん』系……334
二　第二類『文のはやし』系……336
三　第三類『恋の山ぶみ文の枝折』系……337
四　第四類『艶道通言ふみのゆきかひ』系……342
五　第五類『続文のはやし』系……345
六　第六類『ちらしの千話文』合綴本系……348
七　第七類『新はんふみのはやし』系……349
八　第八類『文の文庫』系……350
九　第九類『艶道文の真砂』系……352
十　第十類『恋の山ぶみ文の枝折』系……353
十一　艶書往来の世界……355
第三節　川端康成『眠れる美女』と江戸期の養生法……365
一　『眠れる美女』……365
二　養生法の歴史……369

三　艶書往来に見る養生法の一例……376
四　「養生法」から見た『眠れる美女』……380
初出一覧……389
あとがき……391
図版・表一覧……021(左)
索引（書名、人名）……011(左)
Summary of contents〔Gesaku (Popular fiction) and Ehon(Erotic books): from Bakin to Eisen, the eroticization of fiction〕……003(左)
Preface……001(左)

凡　例

・本書の研究対象は曲亭馬琴をめぐる艶本および艶書往来である。艶本については性的な描写や画像が多いが、研究目的の書であることから、翻刻箇所や画像から性的内容の故を以ての一部削除は行っていない。また原著からの引用部分などに、人権に関わる用語の使用されている場合があるが、学術論文としての性格から原文のままで用いた。ご理解を賜りたい。

・書名等は、難読のものについては最初の記載箇所に読み方を現代仮名遣いで傍記し、書名索引は現代仮名遣いに従って並べた。

・艶本における作者や画師の隠号は、原本の記載を活かし、索引ページに一括して提示した。なお、隠号等については、主に以下の参考資料を用いた。

林美一『江戸枕絵師集成』全五巻（河出書房新社、一九八九～九四年）、『江戸艶本集成』全十三巻、別巻『江戸艶本大事典』（中野三敏、小林忠監修、河出書房新社、二〇一一～一四年）

白倉敬彦『絵入春画艶本目録』（平凡社、二〇〇七年）

早川聞多「春画艶本基本データ」

早川氏には、作成データの使用のみならず種々の御教示をいただいたことを記して、心から御礼申し上げます。

・翻刻・画像掲載部分は、

一、絵組は各丁見開きを一面として画像を掲載し、柱刻のあるものは丁付と裏表を（ウ・オ）として示した。なお、艶本には柱刻がないものも多く、丁付記載を省略した。

一、本文翻刻は丁移りを　」で示し、丁付けを（　）内に原本表記を活かして記した。

一、翻刻については、戯作類は次の方針によった。

○　草双紙は句読点を補い、語句を適宜、漢字に置き換えた。元の仮名は振り仮名に移して原型が辿れるように配慮し、原文に付いていた振り仮名は（　）内にいれ、明らかな誤りが見られる場合は（ママ）と振った。ただし序文等、おおむね振り仮名つきの部分は、その旨を記して原文通りに翻刻した。

○　読本は、原文の句読点、漢字を活かして翻刻した。

○　字体はできる限りそのまま翻刻したが、漢字仮名とも、旧字・異体・略体字は現行のものに改めた。

一、艶本翻刻については、各書による書誌の違いが大きいことから厳密には統一せず、それぞれの特徴を活かして注記を付けた。

○　序文、附文はできる限り、原文のままに翻刻したが、句読点がなく読みにくい場合などは適宜、句読点を補うなどの措置を施した。

○　字体もできる限り原文を活かしたが、作字に頼る文字もあり、漢字仮名とも、旧字・異体・略体字は現行のものに改めた。

図　版

本書には、二百を超える図版を掲載した。架蔵本の他に、浦上満氏所蔵の貴重な艶本類を多数、閲覧・使用させていただいた。また、以下の各所蔵機関にも多くのご協力をいただいた。

国際日本文化研究センター図書館

立命館大学アート・リサーチセンター（以下、「立命館大学ＡＲＣ」と記す）

専修大学図書館

国立国会図書館デジタルコレクション

その他、艶本閲覧をご許可くださり、数々の御教示をいただいた皆様や諸機関に深く感謝申し上げます。

第一章　馬琴と艶本

第一節　『艶本多歌羅久良』――曲取主人の艶本附文

艶本（えほん）は「好色本」として古くは仮名草子時代の寛文十三（1673）年五月の禁令から取締対象とされてきた。[1] その後、享保、寛政、天保の三大改革の度に「好色本之類ハ風俗之為にもよろしからさる儀に候間、段々相改、絶板可仕事」[2]（享保七（1722）年十一月）と取締対象となったが、一番苛烈だったのは天保改革時で、十二（1841）年十二月には人情本と春本が大量に押収されて板木は破却され、筆禍の犠牲者も多く出た。馬琴は『著作堂雑記　三十八』に、この年の六月、合巻『偐紫田舎源氏』の作者柳亭種彦が咎められ、同書が絶版となった件を記し、「予寛政三年より戯墨を以て渡世に做す事こゝに五十三年也、然れ共御咎を蒙りし事なく、絶板せられし物なきは大幸といふべし、然るに今茲より新板の草紙類御改正、前条の如く厳重に被二仰出一候上は、恐れ慎て戯墨の筆を絶て余命を送る外なし」[3]と書き添えた。艶本は禁令発効の後、一、二年はその刊行が著しく減るが、その後にはまた大量に刊行されており、厳しい禁忌の対象となったとは思えない。殊に個人の注文制作である肉筆作品や知人への配り本などの豪華版は取り締まられておらず、江戸後期には戯作と艶本、すなわち合法と非合法の刊行物が併存して、娯楽としての読書世界を作り上げていた。多くの著名な戯作者や画師は艶本と関わって生きていたといえよう。けれども馬琴は法に触れることを恐れ、戯作者として確固たる地位を築いた文政期以降は「好色本」とははっきりした距離を置き、恐れ謹む姿勢をとり続けていた。

曲亭馬琴は法の埒外にある書物との関わりを嫌悪した稀有の戯作者であるが、彼とても艶本の世界とまったく繋がりを持たなかったわけではない。若年時の例外的な執筆はともかく、彼の人気作品は高名な画師たちによって艶本化され、それらもまた、世に広がっていた。曲亭馬琴とその著作に関わる艶本を林美一氏、白倉敬彦氏の目録、早川聞多氏の御教示、[4] 雑誌の特集号などから集めて、**表「馬琴関連艶本一覧」**（表1）とした。艶本はいまだ個人コレクター

表1　馬琴関連艶本一覧

	書名	画師	序・作（隠号）	序・作（戯作号）	刊行年	西暦	冊数 他
1	**艶本多歌羅久良**	喜多川歌麿	曲取主人	曲亭馬琴	寛政十二年	1800	色摺半3冊
2	**春のにしき**	喜多川月麿か	曲取主人	不明	文化六年	1808	色摺半3冊
3	**春窓秘辞**		淇澳堂主人（識語）、飯台狂夫　他	蜀山人、曲亭馬琴　他	文化十年	1813	大本（折帖）1帖
4	**閨精粋股伝**	歌川国虎か	朴念人	歌川国虎	天保元年頃	1830頃	色摺半3冊
5	**艶勢喜雑志**	歌川芳信か	屑（ボボ）山人	桃華園三千麿	天保四年	1833	色摺折帖3冊
6	**恋のやつふぢ**	歌川国貞	曲取主人	花笠文京	天保七年	1836	色摺大3冊
7	**枕辺深閨梅**	歌川国芳	好色外史	花笠文京	天保十年	1839	色摺半3冊
8	**金瓶梅**	歌川国貞		歌川国貞	天保十二年～弘化元年	1841～1849	肉筆絵巻1帖
9	**艶色八犬伝**	二代歌川国貞			嘉永五年	1852	小判12枚組物
10	**淫篇深閨梅**	歌川派	江戸妻恋淫士慕々山人	仮名垣魯文	前輯安政三年 後輯安政四年	1856 1857	墨摺中2冊
11	**佐世身八開伝**	佐勢川茶子	野交庵主人慕々山人	仮名垣魯文	安政四年	1857	墨摺中3冊
12	**枕説遊美張月**	恋川笑山		恋川笑山	安政～文久	1860前後	折帖1冊

や非公開箇所の収集がほとんどで、資料データの集積がなかなか成されないことから漏れも多く、十全のものとはいえない。また表の中でも、残念ながら4『閨精粋股伝』、12『枕説遊美張月』については具体的な情報を得ていない。しかしながら表を辿ることで、馬琴と関わる艶本の大方の傾向を見出すことはできるように思う。

本書第一章では、表中の馬琴自らが関わった艶本を手がかりに、そこから伸びていく思索の経路を追い、馬琴世界にほの見える妖艶な世界の拡がりを攻究する。第二章では馬琴の人気著作に因む艶本を取り上げ、艶本作成に携わる人々の連鎖を辿っていく。第三章は馬琴から離れて、江戸後期の人々に最も親しまれた艶書往来の世界を取り上げることとする。

一　歌麿『艶本多歌羅久良』について

曲亭馬琴が自ら附文（つけぶみ）の筆を執った艶本は『艶本多歌羅久良（えほんたからぐら）』のみとされている。口絵は喜多川歌麿によるが、艶本を量産していた寛政末年の作で、構図や筆遣い、彩色に年を追って歌麿が腕を上げていく様相が窺える作である。殊に上冊の暗闇の中の盗賊ががんどうの灯りを室内に投じ、その光に照らし出された夜具や湯文字の鮮やかさが中央の男女の白く絡み合う肌を際だたせる口絵第三図（図1）や若い丁稚・吉どんを取り合う娘たちの第四図（図2）、涼み

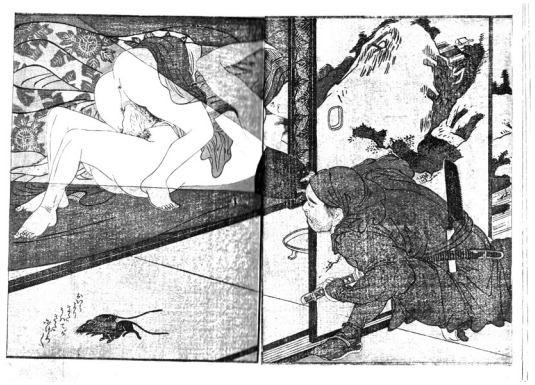


図1　『艶本多歌羅久良』上冊口絵第三図

図2　『艶本多歌羅久良』上冊口絵第四図

図3『艶本多歌羅久良』上冊口絵第七図